

ポイント19 好奇心は進歩の原動力

幼い時期に“発見の喜び”を

幼児期ほど好奇心が強く、絶えず好奇に満ちた目を輝かせて新しい発見を求め回る、という時

期は他にありません。そして「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と常に疑問を抱き、その解明に努めます。

好奇心は強い意欲の表れであって、これが進歩向上の原動力であり、有難いことに、どの子にも立派に備わっているものです。この好奇心がある限り、子供はひとりで頭を使って思考しますので、智能は自然と向上するわけです。

幼児期には、この「自分の頭を使って思考する」ことが大切で、知識を蓄えることなどどうでも良いことなのです。知識を広めるのはいつでも出来ることですが、智能を向上させることは幼児期にしか出来ないことだからです。

だから、“蟻・蜂・蝉”……という漢字を、それらの事物の体験に応じて教えるのはいいですが、「これらの字をよく見てごらん。同じ形をし

た所があるよ」と言って教えないほうが良いのです。まして「“虫”という所が同じでしょ。これは“むし”という字で……」などと教えてはいけません。

それは幼児から“発見の鋭い喜び”を奪うこととなります。そのような知識は与えなくても、幼児に必ず発見できることなのです。早い遅いかはあっても、必ず気が付くはずで、それまで待つことが大切なのです。

コラム

部首 田

整然と区画された“た”の象形。中国では“た”も“はたけ”も田で表す。日本では田は“水田”で、稲を作る所。他の作物を作る“はたけ”は「畑」「畠」で表す。

【画】 田の境界をはっきりさせることを表した字。“区切る”こと。

【畔】 “田を両方に分かつ、真ん中の道”。“あぜ道”。転じて「湖畔」「河畔」。